

## Improvement in 5-Year Relative Survival in Cancer of the Corpus Uteri From 1993-2000 to 2001-2006 in Japan

井上, 修作

<https://doi.org/10.15017/2348700>

---

出版情報 : 九州大学, 2019, 博士 (医学), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Copyright © 2017 Shusaku Inoue et al. This is an open access article distributed under the terms of Creative Commons Attribution License, which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided the original author and source are credited.



氏 名：井上 修作

論 文 名：Improvement in 5-Year Relative Survival in Cancer of the Corpus Uteri From 1993–2000 to 2001–2006 in Japan

(地域がん登録資料を用いた 1993-2000 年から 2001-2006 年における日本人子宮体がん患者の 5 年相対生存率の検討)

区 分：甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

【背景】日本人子宮体がん患者を取り巻く医療状況は、タキサン系およびプラチナ系併用化学療法の普及を含め、1990 年代後半以降、大きく変化した。我々は日本の地域がん登録資料を用いて医療の発展に伴う子宮体がん患者の生存率の変化を評価した。

【方法】山形県、宮城県、新潟県、福井県、大阪府、長崎県の地域がん登録資料より、1993 年から 2006 年までに診断された、合計 8,562 例の子宮体がん症例の情報を収集した。1993 年から 2000 年を第 1 期、2001 年から 2006 年を第 2 期と定義した。それぞれの期間でコホート法を用いて 5 年相対生存率を計算し、Excess mortality model を用いて年齢階級 (15-54 歳、55-69 歳、70-99 歳)、進行度 (限局例、領域例、遠隔例)、組織型を調整し、時代の推移による効果を評価した。さらに、診断年齢別 (54 歳未満、55-69 歳、70 歳以上)、進行度別 (限局、領域、遠隔)、組織型別に分けた解析も行った。

【結果】5 年相対生存率は第 1 期で 77.7%、第 2 期で 80.2%であった。Excess mortality model による評価では、第 1 期と比較して第 2 期の生存率は統計学的有意に改善していた [Excess hazard ratio (EHR) 0.785, 95%信頼区間 (95%CI) 0.705-0.873,  $P<0.001$ ]。層別化解析の結果、55-69 歳の症例、すべての進行度の症例、類内膜腺癌の症例で統計学的有意な改善が認められた。特に、類内膜腺癌の症例では 5 年相対生存率が第 1 期の 84.5%から第 2 期の 89.7%に有意に改善していた (EHR 0.698, 95%CI 0.560-0.870,  $P=0.001$ )。

【結論】日本人子宮体がん患者の 5 年相対生存率は 1990 年代から 2000 年代初期にかけて有意に改善していた。